

## 本の紹介

柴山元彦・寺戸 真・西村昌能・和田充弘著「宮沢賢治と学ぶ宇宙と地球の科学（全5巻セット）」

創元社、2021年7月20日発行

10,000円（税別）、ISBN978-4-422-44031-6

風の又三郎、グスコブドリの伝記、銀河鉄道の夜、双子の星... 宮沢賢治が残した数々の作品に皆さんほどのくらいお世話になったのでしょうか。賢治作品独特の世界観に浸った人、登場人物（動物？植物？無機物？）に共感した人、一体何を言いたいんだ？と首を傾げた人、様々あると思います。本書に紹介される通り、宮沢賢治は25歳の頃から花巻農学校（現、花巻農業高等学校）にて地学教員を務めました。その傍、文学作品を書き続け、書中には数多くの地学を発見できます。そんな魅力的な作品たちを楽しく、分かりやすく読み解きながら、そこに現れる地学をレクチャーする、国語や地学の教科の垣根をこえる面白さが体感できる本書でありました。

著者の柴山元彦先生は、38年間高等学校の教員としてご活躍され、現在は地学の普及を目的とした自然環境研究オフィスの代表を務めていらっしゃいます。オフィスのホームページを訪れ、その活動を検索すると（そうでなくとも各方面から数多くの噂話を耳にしますが）山のような業績が見られます。大阪を中心に近畿圏内のあちこちをフィールドに置き、公開講座や野外調査を行っておられ、インドネシアの子ども向け防災教育活動もされております。ご自身がまさに地学の専門家であり、伝道師であることがよく分かります。そして、本書からは、非常に巧みに学習者の心を掴む様子が感じられました。本書では宮沢賢治作品の中の一節をきっかけに、そこに散りばめられている地学が紹介されていきますので一例を挙げて、評者が心掴まれた様子を紹介します。以下は双子の星という童話です。

突然大きな乱暴者の彗星がやってきて二人のお宮にフッフッと青白い光の霧をふきかけて云いました。

「おい双子の青星...」

「心配するなよ。俺は鯛のようなヒョロヒョロの星やメダカのような黒い隕石はみんなバクバク呑んでしまうんだ。それから一番痛快なのはまっすぐに行ってそのまままっすぐに戻る位ひどくカーブを切って廻るときだ。まるで身体が壊れそうになってミンミン言うんだ。光の骨までカチカチ言うぜ。」

「それじゃ早く俺のしっぽにつかまれ...」

彗星＝彗星の台詞です。この文章に目を通すと、彗星が微小に破碎されながら回転運動することや尾が存在することなどが読み取れます。本書はここから小惑星や隕石、太陽系外縁天体など様々な小天体を紹介します。彗星は太陽の周りを公転していること、彗星には2つの尾があることなど図や写真を用いて詳しく説明します。学習者は「きっと彗星は太陽に向かって双子の星（ポウセ童子とチュンセ童子）を連れて行ったのだろうな。」「双子の星は彗星の2つの尾（イオンテールとダストテール）につかまって飛んだのかな。」と、地学を学ぶことで文学の深まりを実感します。そして、文学へも地学へも向き合う新鮮な感覚で、一層心くすぐられるのです。

昨今の学校現場では、教科横断的な視点に基づく教育課程の編成や授業づくり等が重視されております。そんな中で本書は、文学と地学を横断した新たな学びの形を提供してくれます。書内に現れる登場人物のケンジ先生、たぬきくん、きつねくん、くまくん、ねこさんの会話は素朴ながらも的確に、賢治作品から地学としての重要なポイントを抽出し読者に印象づけます。彼らの会話モデルがそのまま教科横断的な学びの出発点を表してくれているようです。そう言った意味で本書はこれからの学校教育に求められる新しい授業づくりのアイデアを提案してくれているように思います。

最後に改めて、本書は1巻「宇宙と天体」から5巻「気象と海洋」（2巻は「地球の活動」、3巻は「岩石と鉱物」、4巻は「地層と地史」）まで5つのテーマで地球科学の基礎を網羅してくれております。興味が湧いた一つの巻からでも手にとってみると、新感覚の面白さが感じられると思います。宮沢賢治の文学を深く読み解いてみたいけれど理科は苦手という人、自分が研究してきた地学現象や物質が文学作品の中でどんなふうに登場し表現されているのだろうと興味を持った人、教科横断的な学びに関心のある人、地学を身近に感じてみたい人... きっと幅広いファンが生まれることと思います。

（大阪教育大学 平川尚毅）

2021.8.4 受付

2021.9.9 学会ニュースレター公開

2021.9.10 学会ホームページ公開